千器

渡鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
千器

【Ｎコード】
Ｎ３７４８Ｂ

【作者名】
渡鳥

【あらすじ】
破魔師（呪いを解く人）であるクニツナさんの生き方を書いた一話完結の物語でございますーーーーー。

「軍刀」

千器

目の前に広がる暗い緑色。森の中に広がるのは無数に枝分かれした真っ暗な闇である。一寸先は闇――――そんな表現がふさわしい闇の中に関わらず一人の男が枝を掻き分け、歩いている。

「やれやれ、道に迷ったかな？」
ぶつくさと文句を言いながら男は不満げに前に進む。

「大体こんなへんぴな場所に“呪器”なんぞあるのか？」
しかし、進むごとに徐々に枝の数が減ってきている、出口が近い証拠であろう。やがて、目の前に光の玉が見え始めた。

「やっと出口か。」
安堵感の混ざった溜息を吐き、男は苦笑いをした。

「ガセネタでないことを祈るぜ？」
そういうと男の体は徐々に光の玉に溶けるように吸い込まれていった。

＊

奇妙であった。村だというのに人の気配がない。いや、確かに人はいるのだがまるで生気を感じとれない。そう、言うならば生ける屍のようだ。
今しがた着いた旅人に警戒しているのだろうか？いや、それにしてはあまりにも静か過ぎる。

「・・・どういうことだ？こりゃ。」
男は不機嫌そうに周りを睨み付けた。避けられていると言うより、まるで眼中にないという感じだ。話しかけても返ってくる返事はなく、肩を叩いても無視される。さっきからずっとその繰り返しである。

「破魔師のクニツナさんですね？」
背後から細く澄んだ声が聞こえてきた。クニツナが声のしたほうに振り返ると、そこには十七、八ぐらいの若い女が立っていた。

「お待ちしておりました。私が依頼人の夢（イメ）でございます。」

「・・・これは一体どういうことですかな？」
クニツナの声には多少の怒気が混ざっている。まあ、村の人間の態度があまりにもそっけないからであろう。無論、何か原因があることは容易に想像がつく。多少なりともイラつくのは仕方がないとも言える。

「申し訳ありません。・・・詳しい話は私の家にお越しください。」
そういって夢はクニツナを手招きした。木の階段を登り、丘の上にある木造の家屋。そこが夢の家である。

＊

「戦争から持ち帰った軍刀？」

「はい・・・、あれです」
夢は棚の上にある細く、反りの大きい刀を指差した。

「手にとっても？」
こくりと頭を振る夢。クニツナは立ち上がり、棚の上の刀を手に取った。鞘を引き抜き、抜き身をじっと見つめる。そのままクニツナはそっと刃に手を触れた。じわっと手に浮かび上がる赤い直線と液体。しかし、次の瞬間には傷がふさがり水の球であった血も消えた。

「成程、これは憑かれていますな。それもかなりの強さだ。」
クニツナは軍刀の抜き身を鞘に戻し、元の位置に戻した。

「どこでこれを？」
そういってクニツナは夢に眼をやった。

「父の形見なんです。」
そう言うと夢はポツリポツリと思い出すように語り始めた。

話の内容はこうだ――――昔、野盗の一派とそれに対抗して作られた義勇軍との全面戦争があった。数の上では圧倒的に不利な義勇軍は少しでも戦力をかき集めようと、近くの村に寄っては男たちを徴兵していったのである。当然、この村でも男たちが徴兵された。貧しい村であるために、多額の報酬に目が眩んだ町の者達は当然のように戦争に身を売った。そうして様々な町から徴収した結果、義勇軍は元の兵力の数倍も膨れ上がった。そうして、数千という強大な兵力を持った義勇軍は瞬く間に野盗一派を蹴散らしたのである。

「有名な話じゃないか。お前さんの親父さんもその戦に参戦していたのか。」
クニツナはニヤリと笑いながら答えた。

「はい、ですが――――」
夢がそこまで言うと、表情が微妙に歪んだ。その表情の微妙な変化

をクニツナは見逃さなかった。

「ここまでは、有名な話です。」

夢の表情は相変わらず無表情であるが、微妙に手元が震えている。

「そうだな。ここまでは、だ。」

クニツナは自分のコートのポケットからタバコを取り出した。クニツナはタバコに火を着けると大きく息を吸い込んだ。そのまま窓際により、木製の窓を開け空を見上げる。

「・・・。」

窓から外を見上げるクニツナにゆっくりと顔を向ける夢。

「数千まで膨れ上がった義勇軍が報酬を払える訳ねえもんな。」

ふぅうう、と煙を口から吐きながらクニツナは窓から外を眺める。

「なぜ・・・それを？」

「なに仕事柄でね、嫌でもそういった情報は入ってくるのさ。」

信じられないと言った面持ちで見る夢に、クニツナは苦笑いする。

「本当の話はこうだろう――――」

――――野党一派を殲滅した義勇軍は増えすぎた兵に払う報酬がなかった。当然、報酬目当てで集まった兵達は激しく抗議した。しかし無い物をいくらねだっても手に入るわけがない。男達は僅かばかりの報酬で村に帰らなくてはならなくなった。

「当然、報酬頼りだった村の人間達は納得するわけがなかった。そして、一念発起し義勇軍の総大将に抗議することを決意した。しか

しだ――――」
そこまで言うとクニツナはもう一歩タバコを取り出し、火をつけた。
再度大きく息を吸い込み、外の景色に向かって煙を吐き出す。

「業を煮やした総大将は代表の村人達を皆殺しにし、全てを無かった事にした。野盗も、義勇軍の存在もな。」
そこまで言うとクニツナは途端に苦虫を噛み潰したような顔になった。語るのも忌々しそうである。タバコに歯を立て、ギリギリと音を立てる。

「・・・。」
夢は悲しげに下を向いている。こぶしを硬く握り締め、涙をこらえているようにも見える。

「お前さんの親父さんも殺されたんだな。」
クニツナは夢に向き直る。

「・・・はい。」
夢は首を縦に振った。

「恐らく、親父さんは殺される寸前にそいつを強く恨んだんだろうな。その刀からは親父さんの無念さが伝わってくるぜ。」
クニツナは棚に置かれた刀を指さした。

「その刀の呪いを一刻も早くとかない限りこの村はいずれ死ぬだろう。・・・いや、もうその兆候はでてきている。」

「兆候・・・？」

「ああ。」

するとクニツナは家の外に出るように夢を促した。外に出たクニツナは自分の背負っている木箱から一枚の鏡を取り出し、歩いている村人に鏡面をむける。

「夢、自分の姿が移らないように鏡を見てみろ。」
夢はクニツナに促されるがまま脇から鏡を覗き込んだ。鏡を覗き込んだ夢はハッと目を丸くする。

「村の人たちが・・・写ってない?!」

「これがその兆候だ。恐らくあの刀の呪いはお前さん以外の全ての人間の“消滅”だろうな。」
そういうとクニツナは村人を睨み付けた。

「これは厄介な事件だぜ・・・。」

＊

夢の家に戻ったクニツナは夢に呪いについて説明することにした。クニツナの説明によると、刀に宿った呪いは“消華”と呼ばれる類の呪いらしい。ある一定の条件下で殺された人間の恨みが武具を媒介に発生し、ある一定区域内の対象の消滅を謀る。呪いの判別法としては、初期症状として他人に関して無関心（人間性の消滅）になる。症状が重くなると肉体の半透明化（肉体の消滅）、最後には消滅（魂の消滅）する。そしてその媒介となった武具が破壊、若しくは解呪されるまで呪いの効果が続くと言う。

「ならば、すぐに解呪を・・・」
そこまで夢が言うと、クニツナは話を止めた。

「待て・・・。この呪いは簡単に消せるような物じゃあない。」
クニツナは棚の上から取り上げた刀に、先ほどの鏡を向けた。するとである、

『ギシャアアア！！』
獣の咆哮にも似た声が上がった。突然の不気味な声に、夢は怯えたように後ろへ下がった。

「これは“看破鏡”といってな。呪器に関するあらゆる事象を見抜くことができるんだ。・・・これは、かなり根が深いぞ。」
クニツナは木箱に看破鏡を戻すと夢に再び視線を戻した。

「はっきり言うと、このままではあと一年と経たずに村は死ぬだろう。呪いをとくにはこの刀自身を破壊する必要がある。」
クニツナがそういうと夢は血相を変えて近寄ってきた。

「そんな、困ります！！これが父の残した唯一の形見なのですよ！」
夢はクニツナの襟元を掴み、今にも噛み付きそうである。しかし、クニツナは夢の手を振りほどきこう返した。

「その刀をどうしようがあんたの勝手だ。・・・ただ、その刀のために今にもこの村は死に掛けている。それを忘れるな。」
クニツナは夢にそう言い放った。がっくりと膝を崩し、うな垂れる夢。

「肉体が透明化しだしたら治療する手立てはない、決心がついたら早めに連絡をくれ。・・・俺もその時までもっと良い解呪法を見つけてきてやる。」
一人うな垂れる夢を残しクニツナは家を出て行った。かなり強い力を持つ呪器を放っておくのは気が重いが、自分がいたところでどう

にもならないだろう。クニツナは後ろ髪を引かれるように村を後にしたのであった。

＊

数ヵ月後、夢から手紙が届いた。

『拝啓、クニツナ様。父の形見の刀の解呪の決心が付きました。至急、解呪をお願いいたします。』

＊

「どういうことだ・・・。これは。」

久しぶりに村に戻ったクニツナは、その惨状に愕然とした。村の建物という建物は廃墟と化し、畑や田は雑草が伸びっぱなしになっている。しかし、何よりもおかしいのはあれだけいた村の人間が一人残らず消えてしまっている事だ。

「くそ、時を見誤ったか?!」

クニツナは急いで木の階段を駆け上がり、夢の家の玄関を勢いよく開けた。

「夢!!」

クニツナが部屋の中を見ると暗く、一見すると空き家にも見える。しかし、クニツナは木箱から看破鏡を取り出した。部屋の中に太陽の光を反射させ、何かを探そうとする動きを見せた。すると、光に反応した何かがゆっくりと動きを見せた。

「クニ・・ツナさん。」

夢である。しかし、その体は半透明というより透明に近く、消華に

よる影響のためか半分消えかかっている。クニツナは夢に近寄り、体を抱え起こした。

「何故・・・私は消えていないのですか？」

「それは、お前が呪いの対象ではないからだ。」

なぜ夢が消えていないかは、きちんとした理由がある。まず第一に、呪いをかけた者の肉親は呪殺対象から外れるという「肉親外れ」の法則と、呪われていることを知る「呪器の認知」法則による影響である。完全に呪いの影響下から外れるわけではないが、呪いによる死や消滅から逃れることが出来る。無論、その状態のまま衰弱死という可能性は大いにあるため即刻呪器の解呪が必要となる。今回も呪いの影響下から外れたはずであった。・・・しかしである、今回は条件が悪すぎた。あまりにも強い呪いであるために、その影響は実の娘にも僅かに及ぼしていたのである。今はかろうじて魂が現世につながれているが、このままでは後数刻もしないうちに肉体が完全に消滅し、魂のみの存在となってしまうだろう。かといってこの状態を治療する手立ては無いために、もはや八方塞である。

「そうです・・か。」

夢は焦点の定まらない目でクニツナを見つめた。夢はそのままクニツナの顔を撫でる様に手を触れた。

「残念・・です。これで私も逝くことができると思ったんですけどね。」

そう言うと夢はふふっと笑った。

「すまん・・・。あの時無理矢理にでも解呪しておけば良かった。」

クニツナは悔しそうに呟いた。

「いいんですよ・・・。」
夢はそっと目を閉じる。

「私は死んでしまうというわけではないのですね・・・。」

「ああ・・・。この状態では後数刻で完全に透明化し、他人の目には見えなくなるだろう。」
クニツナは木箱から小さな袋を取り出した。クニツナがその袋を開けると、多種多様な丸薬が入っている。

「今のうちに、死ぬか生き続けるか選べ。お前は寿命を全うするまで何ににも触れられず、寝ることも出来ん。生き続ける苦しみを選ぶのが苦痛ならば、今ここで死んだほうが楽かも知れんぞ・・・。」
クニツナは夢に話しかけるが、夢は首を横に振る。そして、夢は笑みを浮かべた。

「私が・・・皆を殺してしまったのも同じ。ならばこれが私の贖罪。私は皆の分まで生きてゆきます。」
そう言うと、夢の目から一筋の涙が流れた。その刹那、徐々に夢の体が透けていく。足から体にかけて徐々に消えてゆき、やがて全身が見えなくなった。

「父の軍刀を・・・お願いします。・・・クニ・ナさ・・・がと・ござ・・・た。」
それっきり一切夢の声が聞こえなくなった。まるで、最初から存在しなかったかのように、一切の音がそこから消滅してしまった。厳かな闇と、耳が痛くなるほどの静寂がその場を支配したのであった。

＊

「なるほど・・・、それが今回の得物か？」
クニツナの前には一人の男が座っている。その男は齢にして二十四、五ぐらいであろうか左目には片眼鏡（モノクル）をかけている。

「その通りだよ、鎬（しのぎ）。」
クニツナの前には一本の抜き身の刀が置いてある。

「しかし、変わった刀だな。こんなに反りが大きいポン刀見たこと無いぞ？本当に日本刀だったのか？」
鎬はクニツナの前においてある刀を取り上げ、抜き身をじっくりと見た。

「疑うなら別に売らんでも良いぞ、呪器蒐集家は幾らでもいる。お前、貴重な友人を失ったな。」
クニツナは鎬の手から刀を取り上げようとした。

「ああっ！！冗談だって、ほんの酒落だよ。」
伸びてくる手から刀を遠ざけると、鎬はクニツナに笑いかけた。

「まぁ、長い付き合いだからな。今回は目をつぶってやるさ。」

「・・・何のことだ？」

「ん？独り言だよ。」
そういいながら、鎬は楽しそうに笑ったのであった。クニツナもフフッと笑みをこぼし、茶碗に入っている酒を飲み干したのだった。

＊

・・・ある所に昔、村があった。その村は度重なる不幸に見舞われ、

壊滅という憂き目に会ったという。しかし、そこには今でも何らかの意志が働いているかのように村の形がそのまま残っているらしい。そして、木の階段の上にある家には、誰もいないはずなのに時折花が添えてあるそうだ。家のすぐ傍、刃が無い軍刀の刺さっているまるで墓標のような場所に・・・。

「前編　鬼綴り」

千器　鬼綴り

季節は秋、山も緑の衣から赤い衣に衣替え季節である。
しかしこの頃美しい山の近隣にある村々には、ある噂が流れていた。
“満月の晩、それはそれは恐ろしい鬼女が人を喰う”と。
只の風評かと思われたその噂は、その山の近辺の村のみだったが、
最近になって山を一つ二つ越えた先にまで広がるようになった。
只、噂は噂に過ぎないのかその鬼女の被害にあった者はおろか、見
た者すらいないという有様である。当然のように噂は風化し、いつ
しか消えゆくかと思われた。
しかし、最近になって新たな事件が起る。
山のふもとのある村が鬼によって壊滅された、と。

＊

どこまでも広がる廃墟。もともとは人の往来があったであろう山道
も今や通れないほどである。地獄のような光景、その表現がぴった
りである。知らなければそこには村があったなどと信じられないほ
どに壊滅的だ。

「・・・これは自然現象なんかじゃねえな。」
灰色のコートを着た男が呟いた。脇には山伏が背負うような木箱、
口には紙タバコを咥えている。一見すると旅人のような風体をして
いる男、クニツナである。

「とにかく話を聞かにゃあ始まらん、一度依頼者に会って・・・。」
そう言うとクニツナは何かを感じ取り、チラッと廃墟に目をやった。

すると、廃墟の中にゆらりと動く影が見えた。クニツナは音を立てないようにそっと廃墟の影に寄り、腰に挿した短刀を取り出した。廃墟の中へそっと耳を立てると、怪我でも負っているのか荒れた息遣いが聞こえてくる。

（三・・・二・・一。）

頭の中で飛び出すタイミングを測る。村をここまで破壊できるのだ、短刀ごときでは到底かなわないことはクニツナも十分承知している。しかし破魔師である以上、呪器に関するであろう事柄からは目をそらす訳にはいかない。クニツナは短刀を握り締め、素早く廃墟の中に飛び込み、身構えた。すると、そのなかには

「うわぁぁぁぁぁぁ！！」

齢にして二十四、五の男が腰を抜かしていた。

「・・・誰だ、お前ェ。」

クニツナが呆れたような声を上げた。

「あ、あああ貴方こそ誰ですか？！」

泣きそうな声でクニツナに叫ぶ。

「俺は――――、！！」

クニツナはそこまで言いかけると、背後からゾクリと殺気を感じ取った。かなり強い殺意である。

「・・・。」

クニツナが背後を向くと、そこには齢にして十九ぐらいの美しい女が立っている。気品を感じさせる顔立ち、肩まで伸びた長い髪は男なら見ずにはいられぬほどである。しかし、信じられないことに野

生の獣のような殺意はこの女から発せられているのだ。外見は華奢だというのに、まるで狼のようである。また、端麗な容姿に似つかわしくない無表情さが、殺気と相まってまた一段と恐怖を掻き立てた。

「・・・。」

女が右腕をクニツナに向ける。すると、女の右手を中心に空気が渦巻き、壊れた木窓がガタガタと震えだした。ただならぬ気配に、クニツナは危険を感じ取ったのか、短刀を身構える手に力が入る。そして次の瞬間、それは放たれた。

「ぐう！！」

ズドンという音と共に、空気の壁のような物に叩きつけられた。すさまじい威力にクニツナは廃屋の外へ飛ばされ、草むらの上に落下する。

しかし女はクニツナを追わず、男の前に立った。無表情に男を見つめる様は、まるで野獣が獲物を狙っているようだ。

「ギリ――――何故逃げるの？」

女が口を開く。相変わらず無表情であるが、クニツナのときとは違い、微妙に口が緩んでいる。

「あ、絢（あや）。べ、別に逃げたわけじゃ・・・。」

「そう――――じゃあ帰りましょう？私達、恋人同士じゃない。」

不気味、そんな感想を率直に感じさせる笑みである。和み、ホッとさせるような微笑ましさは無くどちらかというと相手を震えさせる狂喜が満ちている。

絢はギリに手を差し伸べる。

「ヒッ！！」
ギリは顔を背ける。そんなギリの様子に絢は顔をしかめた。
「――――まだお仕置きが足りなかった様ね。」
するとである、今まで何も付いていなかった絢の額が盛り上がり始めた。その額のしこりのような物は、徐々に長くなり、角のような形となる。角を生やしたその姿はまるで鬼のようだ。絢はそのままギリを掴もうと、更に腕を伸ばした。
その時、ヒュウという音と共に絢の体へ緋緋色の鎖が巻きついた。鎖の絡む音と、骨が軋むような音と共に絢の体が拘束される。

「兄さん！！早く逃げろ！」
声と共に建物の影からクニツナが現れた。腕からは鎖が伸びている、鎖はそのまま絢に巻きついているようだ。

「こ、腰が・・・。」
ギリは情けない声を上げた。

「馬鹿、それでも男か！！・・・くそっ、眼をふさげ！！」
そういうとクニツナは木箱からガラス製の小瓶を取り出した。片手で蓋を開け、口に咥えたタバコを押し込むと、すぐさま廃屋に投げ入れる。すると、激しい閃光と共に廃屋内に爆発音が鳴り響いた。両手が自由であるギリとは違い、鎖で拘束された絢は眼を塞ぐことが出来ない。まともに光を受けた絢は苦しそうにうめき声を上げた。そして時間がたち光が消えると、もうそこにギリの姿は無かった。絢の体を拘束していた鎖もいつしか姿を消している。拘束を解かれた絢は両手で眼を覆い、悔しそうに叫び声を上げたのだった。

＊

絢から逃げることに成功したクニツナは、山道にある洞窟に逃げ込んでいた。クニツナはコートから紙タバコを取り出し、火を付けた。淡い光と共に、暗い洞窟の中に小さな光が灯る。

「ようやく撒いたか・・・。」
大きくタバコを吸い込み、ふぅぅと煙を吐き出した。

「ん――――ここは。」
クニツナの隣でのんきに気を失っていたギリが眼を開けた。

「よお、気付いたか。」

クニツナは煙を吐き出しながら答えた。

「ここは廃村の近くにあった洞窟さ。――――――紹介が遅れたな、俺はクニツナ、破魔師をやってる。」

「破魔師だって?!」
ギリは立ち上がり、大きな声を上げた。洞窟内に声が響き渡る。

「あー、うるせェな。んなデカイ声を出さんでも聞こえてるよ。」
クニツナは耳を塞ぎながら答えた。

「ご、御免。」
ギリは座り込み、二人の間に沈黙が流れた。嫌な空気である。
とりあえずクニツナは話を聞くために、絢にかかった呪いについて説明することにした。

「――――お前さん、“鬼依(きえ)”って知ってるか?」

数秒の間の後、クニツナがボソッと呟いた。
「え？いいや――――なんだい？」
うな垂れていたギリは頭を上げ、クニツナを見た。
「彼女に影響している呪いさ。この呪いがかかった物を身に着けると、心と肉体が鬼に支配される。この呪いにかかるのは専ら恋人同士で、男に捨てられた女が今の女の肉体と魂を支配する。当然、逆もまた然りだ。――――言うならば未練がましい恋人の想いが、今の恋人を妬む分かりやすい呪いだな。」
そこまで言うと、クニツナはギリを睨み付けた。間髪いれずに話を続ける。
「だがな、この呪いは滅多にかかることが無いんだ。何故ならば、この“鬼依”って呪いの発動条件は、捨てられた恋人がこの世にいないことが条件だからな。」
「――――――！！」
ギリの眼が一瞬変わった。明らかに動揺を隠せないようである。
今のギリの態度を見て、クニツナは半信半疑だった“鬼依”を確信した。
するとクニツナは素早くギリの襟首を掴み、声を荒げた。
「やはりそうか、ならば女の死に方はなんだ？――――言え！！」
ギリの着物を締め上げるクニツナ。このままでは窒息してしまう可能性があるが、ここで追及を止めるとギリは黙ってしまう可能性がある。力づくであるが、口を割らすにはこれが一番手っ取り早い。
クニツナは襟を閉める手の力を、徐々に強めていった。
「入水・・しました・・で・・も・・僕・・は何も・・覚えては・・

。」
ギリは声を絞り出した。相当苦しいのだろう、文章がちぐはぐである。
「本当に入水だろうな？――――お前が殺したんじゃないな？」
「は・・い。間違い・・ありません。」
ギリが答えると、クニツナは着物を持つ手をゆっくりと緩めた。気絶寸前まで締め上げたせいであろうか、ぐったりと地面に倒れこむ。
「そうか――――良かった。」
「え？」
「彼女を救う手段はまだあるということだ。」
クニツナは木箱から短刀を取り出し、ギリの方へ投げた。短刀はカラカラと音を立てて、地面に倒れこんでいるギリの傍へ転がった。
「仮にお前が桐絵を殺したとするならば、このままお前を殺し死体を晒すつもりだった。しかし、彼女は“殺意”ではなく、お前への“想い”を胸に死んだということになる。」
クニツナは短刀を取り出しギリに向けた。ギリは一瞬怯えたような顔になったが、クニツナが短刀を下ろすとすぐさまホッとした様な顔になる。
「いいか？今の絢を救うには、桐絵の想いを完全に断ち切る必要がある。そのためには、今の恋人である絢への想いを桐絵にぶつけ、桐絵の想いに打ち勝たねばならん。――――わかるだろ？」
クニツナはそこまで言うと、ギリへ手を差し出した。

「お前にしかできんことだ、やってくれるな。」
クニツナの手を掴み、ギリは立ち上がった。ちらと短刀を見ると、困ったようにクニツナに視線を向けた。
「そんな、僕には無理ですよ・・。クニツナさんみたいに強くも無いですし、何よりもこわ――――。」。
「お前にしか出来ねえって言ってんだろ！！！絢を助けたくねぇのか！！」
ギリが言い終わる寸前に、クニツナが一喝した。あまりに激しい剣幕に、ギリは呆然となる。

「それにこれはお前だけの問題じゃない、桐絵に対する救済でもあるんだ。――――いいか？お前の過去に何があったかは知らんし、聞く気もない。しかし、彼女はお前を想ったまま入水したんだ。その気持ちだけは酌んでやれよ。」
クニツナがそう言うと、ギリは少し吹っ切れたようだ。表情は相変わらず不安そうだが、瞳の奥に決意の色がはっきり見える。ゆっくりと足元に転がった短刀を拾い上げ、クニツナを睨み付けた。そして、そのまま握り締めた短刀に眼をやるとコクリと首を縦に振り、着物に挿し込んだのであった。
その様子にクニツナは、軽い笑みを浮かべた。そして最後に、こうも付け加えた。

「一つだけ言っておく。桐絵はありとあらゆる手段でお前を手に入れようとするが、何一つとして同意するなよ。奴は鬼の力を持っている、少しでも気を抜くと奴に取り込まれるだろう。」
クニツナの言葉に、ギリは神妙な面持ちで頷いたのであった。

＊

赤い満月が、不気味に雲の間から顔を覗かせている。いかにも何かが起こりそうな、不吉な夜だ。ざわざわと生暖かい風が不気味に廃墟を吹き抜ける。その廃墟の中心部、前までは広場と呼ばれていた場所に人影が立っている。

「桐絵！！僕だ、出てきてくれ！！」

ギリが声を上げ、絢（桐絵）を呼ぶ。――――クニツナはギリに只それだけを指示していた。まず、鬼依に呪われた者を解呪するためには、弱点でもあり力の源である額の角を切り落とさなければならない。そのためにギリが大声で桐絵を呼び、クニツナが緋緋色鎖（ヒヒイログサリ）にて拘束する。その隙にギリが説得し、桐絵の額の角を切り落とす。これが主だった作戦である。ただ額の角は鬼の本性が現れない限り生えてこないため、そこではギリによる説得が非常に重要になってくる。

「ギリ――――ようやく分かってくれたのね。うれしいわ。」

闇の中に声が聞こえた。桐絵はギリの呼びかけに応じ、廃墟の影から姿を見せた。更に今回は昼間のような禍々しい笑みではなく、今回は自分を理解してくれたということからくる自然な笑みを浮かべている。ギリは絢の顔で微笑んでくる桐絵を見て、少し複雑な心境を感じた。

「今だ、行くぜ！！」

その時である、廃墟の屋根に潜んでいたクニツナが声を上げた。桐絵が廃墟から出てきた瞬間を見計らって幾多もの鎖が桐絵に襲い掛かる。ギリだけに気を取られていたせいであろう、身構える暇も無く一気に全身を拘束され、動きを止められる。さすがにこうなると、身動きは不可能だと思われた。――――しかしである。

「賢しい真似ヲ――――邪魔ダ！！」
さっきまでの穏やかな表情から一変、一気に鬼の本性が露になる。額からは皮を一気に突き破り、見るも禍々しい大きな角が生えてきた。また、眼は血走り、全身から血管が浮き出てきている。その状態のまま、桐絵は腕を引っ張った。その力は女の細腕であることが信じられないほどの強さだ。
一方クニツナはあまりの怪力に、苦悶の表情を浮かべた。いくら桐絵が女でも、鬼との力の差は歴然だ。メキメキと骨が軋む嫌な音が、腕を通して自分自身に伝わってくる。

「ギリ、角を切り落とせ！！」
クニツナは激痛の走る腕で桐絵の力を必死に押さえ込む。少しでも油断すると、腕が引きちぎられそうだ。
ギリは、首を縦に振り、腰に挿している短刀を引き抜いた。そのまま、桐絵に向かって駆けだす。

「うおおお！！」
短刀を握り締め、叫びをあげるギリ。角を落とされまいと、必死で抵抗する桐絵に徐々に近づいていく。
しかし桐絵まで後もう少しというところで突如、ギリは決意を曇らせた。ついさっき見た絢の笑顔が、彼の罪悪感を増させたのだ。徐々に足の動く早さが落ちだし、ついにギリの足は動きを止めてしまった。
しまった――――ギリは先刻のクニツナの言葉を思い出した。
“奴は鬼の力を持っている。少しでも気を抜くと、奴に取り込まれるだろう。”
いまさらながら、脳裏に浮かび上がるクニツナの警告。ギリは自分自身の意志の弱さに後悔した。

つい先程見た絢の笑顔が、彼の刃を鈍らせたのだろう。彼の握る短刀は、後もう少しで届くというところで動きを止めた。

「ククク――――アハハハハハ！！」

そんなギリの様子に、桐絵は狂ったように笑い出した。恐らく神通力の類であろう、ついにギリの下半身は石のように重く、動かなくなった。それでもギリはかろうじて動く上半身をバタつかせ、桐絵の角を切ろうとする。しかし後もう少しというところで切っ先が当たらない。

「コンナ物デ、私ヲ止メヨウトハ――――浅ハカダナ、破魔師ヨ！！」

そういうと、桐絵の腕を拘束している鎖がバキンという音を上げ砕かれた。それを引き金に、桐絵の全身を拘束している鎖も徐々に破壊されてゆく。

「馬鹿な！！」

鎖が破壊され、反動で後ろに吹っ飛ばされた。そのまま廃墟の屋根から落下してしまう。

「クニツナさん！！」

身動きが取れない状態で、廃墟を見上げるギリ。しかしクニツナは周囲におらず、周りの草むらにも人影らしい物は無かった。クニツナが消えたことにより、一気に無力感がギリの心を塗りつぶす。

「ウフフ――――ヨウヤク邪魔者ハ消エタ。」

ギリの目の前に顔を近づける桐絵。無慈悲にも恋人の姿で笑みを浮かべる桐絵に、ギリはどうすれば言いか分からず肩を落とす。目の前にいるのはもはや絢でも桐絵でもない、只の鬼なのだ。しかし彼

の罪悪感が、目の前の鬼に刃を向けることを躊躇させる。手を伸ばせば届きそうな距離に勝ちが見えているというのに、その一歩を踏み出せない自分が腹ただしかった。

「コレデ、ヨウヤクアノ時ノ様ニ・・・。」

うな垂れるギリに、桐絵が抱きついた。鬼の力で強く抱きしめられているせいか、体中にメキメキという音と共に、激痛が走る。体中の骨が悲鳴をあげ、肉体が壊れ出し、意識が遠のく。

（もう――――駄目なのか？――――俺は絢どころか、桐絵すら救えないのか？）

遠のく意識の中で、ふとギリがあることに気付いた。桐絵の目から涙が流れている。その涙が何を意味するか分からないが、ギリだけはあることを思い出していた。

俺は前にも同じ光景を見た――――ギリは、もう忘れてしまった思い出を蘇らせる。

それは、儚くも悲しい過去の記憶。ギリがもう二度と思い出すまいと固く誓った記憶でもある。失った記憶が、次第に彼の頭の中を埋めていった。

（前編・完）

後編「凶祓い」

後編・凶祓い

ギリにはごっそりと抜け落ちた記憶がある。それは、桐絵が彼を執拗に求めることと関係があるのだが、何が起こったか彼はその全てを思い出せないでいた。

ギリは桐絵が自ら入水したことを断片的に覚えているのだが、“なぜ”入水してしまったのか、それを思い出せない。そして、何故自分にそのときの記憶が無いのかも、分からなかった。桐絵――――彼女のことは覚えている。しかし、誰なのかがわからない。悲しいかな彼は、桐絵という名前以外に彼女のことを忘れてしまっていた。そう――――この時までは。彼は全てを思い出したのである。

＊

――――凶祓い。村に何らかの災いが起こったときに、年端の行かぬ娘を生贄に神に慈悲を乞う。

今は無くなってしまったギリと桐絵の住んでいた村に、そんな風習が残っていた。何を全時代的な――――そんな声が聞こえてきそうであるが、山奥の村にはそんな風習がずっと続けられていたのである。ある時、他に類を見ない程の豪雨が村周辺の一帯を襲った。その雨は河を氾濫させ、田畑を壊滅させ、村に壊滅的打撃を与えた。村長はこれを神の怒りと感じ取り、凶祓いを行うことにした。そこで白羽の矢を立てたのが、村唯一の娘である桐絵であった。当然、恋人同士であったギリは反発した。しかし、時はすでに遅く桐絵は河の氾濫を止めるために、中洲に立たされていた。ギリは皆の制止もきかず、激しい濁流の中に船を出す。しかし、当然のように船は転覆、ギリは濁流の中に飲み込まれてしまった。桐絵もギリの後を追い、

入水する。

「――――貴方のいない世界に意味はないわ。だから、私も一緒に――――」

――――――数日後ギリは濁流に流されて、奇跡的に海の近くの村に流されていた。そこで絢という女性に拾われ、今に至る。そしてギリは絢と結ばれ、しばしその村で過ごすが、自分の村がどうなったかが気がかりだったギリは、絢を連れて村に戻る。村に戻ったギリは、絢と共に新たな生活を始めるが、そこで鬼依が発呪する。

これが、彼の思い出した全てであった。

＊

全てを思い出したギリは、桐絵の肩を抱きしめた。そっと頬に触れ、桐絵の頬の涙を手でぬぐう。

「そうかーーーーやっと思い出したよ、桐絵。」

「酷イジャナイ、何故忘シマッタノ？私ハココデズットマッテイタノヨ？」「すまん。俺は、死ぬことが出来なかった。その挙句にお前も忘れてしまっていたとはな。だが――――――もう遅すぎる。そう、何もかもな。」

「イイエ――――――今カラデモ遅クハ無イワ。私ト一緒ニ逝キマショウ？」

そこまで言うと、桐絵は抱きしめた腕により一層の力を加えた。するとギリの右腕は骨の折れる音と共に、垂れ下がった。腕以外にも体の至る所から、骨の軋む音が聞こえてくる。しかし、ギリは悲鳴

もあげずに耐えている。まるで、贖罪をしようとせんばかりである。
このまま、死んでしまおうかと思ったギリは静かに目をつぶった。
しかし、その時である。

“生きて――――”

確かにそう聞こえた。聞き覚えのある声だ。しかし長らく聞いていない、昔懐かしい声のように聞こえる。只の聞き間違いかも入れない、死の淵に立って走馬灯を聞いただけかもしれない。しかし、それでもあきらめかけた心は奮い立った。自分のやるべきことを思い出すには十分すぎるほどの力が体にみなぎる。

「今だぜ、ギリ！！」

聞き覚えのある声と同時に、背後から短刀が飛んできた。それは桐絵の右手に刺さり、短刀を生やした腕からは血が吹き出る。ギリは、短刀を引き抜き握り締めた。

「ギャアアぁあァァァあ！！」

突然の痛みに叫びを上げる桐絵。すかさず右手をギリから離し、左手の力も僅かに緩まる。その隙を突いて左手から抜け出したギリは、折れた右手から左手に短刀を持ち替えた。

「桐絵――――すまん。」

桐絵の額を狙って一閃。桐絵に生えていた角は空中で一回転し、地面に転がった。と、同時に桐絵から出ていた禍々しい気配は姿を消し、桐絵は絢に戻った。気を失っている絢は、意識を失い膝から崩れ落ちる寸前に、ギリが左手で抱え上げた。
一方、クニツナは角を拾い上げ、笑みをこぼしながら呟いた。

「やるじゃねーか。」

――――――ここに、解呪は成功したのである。

＊

一年が過ぎた頃、クニツナ宛に一通の手紙が届いた。宛名にはギリとあり、内容は婚姻したとあった。クニツナは解呪したときに関わった人間とは、あまり関わらないようにしているのだが、放っておくのも野暮かなと思い様子のみを見ることにした。
再び慣れた道を歩み、クニツナはある場所へとたどり着いた。そこは解呪した場所、例の廃村であった。

「またここに来るとはな――――因果なもんだ。」
クニツナがタバコを咥えながら呟いた。相変わらず灰色のコートを着込み、背後には木箱を背負っている。

「あん時、これが無かったらやばかったな。鎬んトコに売らなくてよかったぜ。」
そう言うと、クニツナはコートのポケットから掌大の球を取り出した。

「なあ？桐絵さんよ。」
クニツナがそう呟くと、目の前に靄のような物が現れた。それは次第に形を成し、人型となってゆく。

『ふふ、そうですね。』
そこには、髪の長い少女が現れた。齢にして十七、八ぐらいであろう。

「しかし、驚いたぜ。まさか、“命体”から依頼が届くとはな。」

命体とは恨み、憎しみから構成される呪体とは違い、想いが意識を持った存在である。命体の発生条件はまだ分かっていないが、何かを成す為に生まれ、存在しているらしい。元来、命体は他人と会話することが出来ないのだが、クニツナの持っている球、“反魂球”を利用することによって肉体の具現化と会話が可能となる。しかし反魂球の力は強すぎるため、そんなに頻繁には使えない。

『貴方ならギリを救ってくれると思いましたから。それに、ギリと同じような境遇の貴方なら――――ハッ！！』

あわてて口を紡ぐ桐絵。しまったという表情が見える。

「――――そこまでだ。俺にはそんな境遇などない。ただ、珍しい呪器があった。只それだけだ。」

クニツナは鋭い目つきで桐絵を睨み付けた。

『すいません。無神経で――――。』

桐絵は頭を下げた。透けた体がクニツナを通り抜ける。命体は体が透ける故に、距離感が無くなるのは本当らしい。

「気にするな。お前はどうなんだ、あいつが他の女とくっつくのは悔しくないのか？」

クニツナはわざと意地の悪い質問をした。だが鬼依の再発症を防ぐために、未練があるかどうか聞かねばならない。

『正直言うとちょっと妬けちゃいますね。でも――――』

「でも――――なんだ？」

『もうあの人には絢さんしか映っていない。もう私の出る幕はないんです。』

桐絵はそう言うと悲しげな表情を浮かべた。すると、クニツナは桐絵から目を反らした。クニツナといっても人の子、女の涙には弱い。

「あーその、なんだ。」

クニツナがかける言葉を捜し、戸惑っていると、背後から人の気配を感じた。桐絵も今は目視できるため、知り合いに見られるとちょっとした騒ぎになる。あわててクニツナと桐絵は廃墟の陰に身を隠した。

「こんなトコに一体誰が――――ッ！！」

クニツナの視線の先には見覚えのある人影があった。

「桐絵――――すまなかった。」

「桐絵さん――――――。」

ギリと絢だ。ふたり合わせて合掌している。クニツナの顔には微かな笑みが浮かぶ。

――――奴らは桐絵を忘れちゃいなかった。只その事実がクニツナにはうれしく感じられた。

「――――――何か言うことはあるか？」

『――――いいえ。』

そういう桐絵の顔には涙が溢れている。しかし、表情も笑みで溢れていた。そのまましばしの時間がたち二人が去ると、クニツナと桐絵は廃墟の陰から姿を現した。

「あんたは自分の出る幕はないと言ったな？だが、それは間違いだ。あんたはこれから、あの二人を見守っていくという仕事が出来た。」

クニツナが反魂球を空中に投げると、球は桐絵に吸い込まれるよう

に消えていった。

「あんたはこれで消えちまうが、大丈夫だ。お前は奴らと共に生き、奴らの行く末を見てやれ。――――地獄の閻魔には話をつけておいてやる。頼んだぜ？」

クニツナがそう言うと、次第に桐絵の体が透けていった。

『ありがとうございます。クニツナさん。またいつか会いましょう。』

「なに、角の礼代わりだ。――――縁があったらまた会おう。」

そう言った瞬間、クニツナの前から桐絵の姿が消えてしまった。風で木の葉が擦れる音以外にはもう何も聞こえない。廃墟を吹き抜ける風はどこまでも冷たかった。しかし、クニツナの顔には笑みが浮かんでいる。そして、呟いた。

「お前らに祝福があらんことを」

季節は秋。空には枯葉が舞っていた。

＊

――――ある村にて大層中のいい夫婦に子供が生まれたそうだ。

その子は、大層かわいらしい聡明な子供らしく、夫婦も大層かわいがっているらしい。

たしか・・・名前は――――――

（ある旅人の旅日記より）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3748b/

千器

2010年10月14日01時42分発行